

井戸端だより

第71号

発行日：2010年9月24日

発行：くらしの学習会

まじ

7月例会報告	1
ジャコウアゲハの保護をアピール	2
「多自然川づくり研修会」に参加して	3
9月例会報告	5
例会直後のメールより	6
ジャコウアゲハ 2010	7
離乳期の食べ方あれこれ	8
安楽死	9
雑感	10
お知らせ 編集後記	15



7月例会報告

場 所 広瀬歴史記念館（新居浜市）
日 時 7月14日 午前11時過ぎにH家出発
参加者 7名

広瀬歴史記念館は、幕末・明治の動乱期に、政府による接収や住友の経営難による売却から別子銅山をまもり、さらには、日本の産業の育成にも力を注ぎ、国の発展にも貢献された広瀬幸平氏の足跡をたどりながら、新居浜市の生い立ちや近代産業の歩みを振りかえることができる施設です。

記念館には、展示館と旧広瀬邸の二つの建物があります。展示館は、実に近代的な設計でしたが、幸平に対する尊敬や慈愛が形になっている場所には、人間くささがありました。見学者の入館料で職員費や維持費は出ないだろうと思われましたが、本来ならば事業仕分けされる事業でも、住友の税収や寄付で維持されているのかなあと納得。この設計者の名前を探したのですが、わからなかったのは残念でした。

旧広瀬邸は、国指定重要文化財です。「別子銅山を支えた実業家の先駆的な近代和様住宅」として平成15年5月に指定されました。明治10年に建築された母屋は、開国により西洋から輸入されたマントルピースや西洋便器、板ガラス、避雷針といった新しい文化と日本建築様式が調和しています。私は、これだけ大きな木造建築の建物に入ったのは初めてでしたので、台所の広さやガラス戸の色々な工夫に驚きながら楽しく見学しました。現在地に移築されたのは、明治20年、その後、22年には庭園が造られました。うっとり朝からの雨でしたが、庭園散策に風情が加わりました。庭の木々は、乾いた色より湿った色がいいものです。そしていつものように、記念写真。

広瀬邸見学前に、本格的なアフタヌーンティーを味わいました。プレーンとミルクのアールグレイを二杯。サンドウィッチとスコーンとケーキと果物。とても丁寧に作られたものでした。

丁寧に作ること、それを維持すること、守ること、料理も建物も、そして、人もそうなんだなあと思いながら、帰路につきました。

皆様、お世話になりました。そして、いつもながら、Hさん、車の運転、御苦労さまでした。
(M T)

ジャコウアゲハの保護をアピール

8月31日猛暑の中、多自然川づくり研修会に参加しました。午前中は財団法人リバーフロント整備センターの方の講演があって、午後は現地見学でした。

現地見学はバスで4ヶ所、まずは公園として整備された広瀬霞堤、24年度から改修予定の開発霞堤、良好なモデルとしての三カ村泉、そして有形文化財の除ヶの堰堤の4カ所でした。

広瀬霞堤は、以前のゴミに埋もれた草むらが跡形もなく消え去り、きれいな公園になっていました。自然環境に配慮した工事とのことでしたが、見たところは特に変わった景色というわけではありませんでした。ただ、池の底は手をつけずそのまま、重信川に続く水路は生活排水と別に作られていました。昆虫もかなり復活したそうです。しかし限られた面積で、遊歩道をつけ人工の水路を作るとなると、どうしても陸地部分と水面部分をくっきりと垂直線で分けざるを得ません。斜線部分の湿地を残すのはなかなかむずかしいと思いました。

開発霞堤の改修予定地は土地の低くなったあたりの湿地ということでした。近くの霞の森公園で、学習会が取り組んでいるジャコウアゲハの保護活動について話をしました。ジャコウアゲハは湿地ではなく土手の部分に生息していますが、そこを管理する国土交通省の方に話を聞いてもらうのにはいい機会でした。今までの保護活動や蝶のくる庭づくりについて、写真資料にまとめて配布しました。その資料をもとに、身近な普通種であるこの蝶を保護することの大切さや、一般の人達がよく訪れるこの場所で保護区を作ることの必要性、一種類の昆虫を保護することはその地域全体の自然保護につながることなどを訴えました。さらに草刈りの時に地面すれすれではなくて草丈を少し残して刈ってほしいこと、蛹になる時に必要な木とか石とかを数十mおきに設置してもらえないかということ等もお願いしました。このことについては後日、国土交通省の方から少し詳しく話を聞かせてほしいというメールをいただきました。

開発霞はジャコウアゲハだけではなく湿地性の昆虫も多く生息していると思います。以前聞いたことのあるゴムムシの仲間についても、どんな顔をした虫なんだろうと興味がわきました。

今回、重信川周辺の整備後の様子を見たり今後の整備計画を聞きながら、できれば子ども達の身近に昆虫採集のできる環境を残しておきたいと思いました。(k・k)

「多自然川づくりの研修会」に参加をして

鞍瀬塾主催による研修会のお知らせを頂き、中予地区の内容の説明者の中に「くらしの学習会」メンバーのKさんの名前があり『ジャコウアゲハの保護活動について』との事、代表であるHさんに伝えると「くらしの学習会」としてメンバー4名で8月31日（火）13時～16時 実地研修「重信川自然再生事業」に参加する事に（夏バテ気味で1名残念ながら参加できなくなりました）Kさんは午前中の講義「多自然川づくりについて」から参加し、とてもおもしろい内容だったようです。13時小型貸切バスで松山市水防センターを出発（残暑厳しく保冷剤持参で暑さ対策万全で出かけたのですが冷房の効いたバスでの移動は快適でした）

*砥部町 広瀬霞（霞堤の再生）

「広瀬霞再生プロジェクト」－昔の広瀬霞の再生、貴重な魚、植物などの保管庫－ 整備方針として、失われた湿地環境の再生と治水機能の保全・減少した動植物の再生・悪化したネットワーク機能を再生し、目指すべき環境は「三ヶ村泉」（泉は水路によって重信川とつながり、霞堤の湿地も重信川とつながり、水と緑のネットワークを形成している）このような再生事業が行われた場所を初めて目にして、失ったものを再生する為にかかる費用と労力について考えさせられました。事業を始めるための費用はきちんと出されるが、その後必要な維持管理費は出してもらいにくいのが現状のようです。その為、なるべく管理しやすい工法で作ってしまうことになるとの事（再生した泉の回りには間伐材風のコンクリート製の柵が巡らせてある。間伐材だと朽ちるのがコンクリートより早いので管理費用がかかる為）毎年清掃作業のボランティア活動を行いクヌギの苗木を植樹しているそうです。それらの木々がこんもりとした林になるのには随分時間が必要ですが、大切に育ててほしいと思います。

*東温市 開発霞（かすみの森公園）

ニレ林の下で、Kさんの「ジャコウアゲハの保護活動について」以前この場所の近辺にはジャコウアゲハの食草（ウマノスズクサ）があり生息できる環境が整っていたが河川敷の草刈りによって減少（以前は5cm程度残して刈られていたのが最近地面すれすれまで刈るため新たに伸びることができず無くなってしまう）そのため、根っこを掘り起こし別の場所に植え直しを何度も挑戦したがうまくいかず、最近、介護施設の庭を利用させてもらってジャコウアゲハが生息できる環境を整える活動や、小学校で『蝶のくる庭』の

お話会をしたりして頑張っている。「くらしの学習会」のメンバーも自宅で『蝶のくる庭』を実践し、ご近所の方々も協力してくれそのエリアではジャコウアゲハが飛び交っている。先日その光景を目の当たりにし感動しました。この日松山河川国道事務所の方が来られていたので、河川敷の草刈りを5cm程度残して刈ってもらえる様再度お願いをした。1990年 かすみの森公園を作る際湿地エリアを作ったのだが、現在、草原状態に変貌しているので、取水井戸から水を引き込み湿地に回復させる工事の計画（2012年開始予定）をしている。バーベキューの家族連れでにぎわっている場所に湿地があった事を初めて知りました。ニレ林の中は風が吹き涼しくとても心地よく、前日久し振りに降った雨で水路には水が流れていたが、広瀬霞の水路では魚が死んでいたのも、瀬切れ（川に水が無い状態）区間の延長により、様々な問題が発生しているようでした。

*東温市 三ヶ村泉

「くらしの学習会」原点の一つとしてこだわりの場所である三ヶ村泉は何時行っても裏切らない所です。以前よりは水路や鏡の部分の水草（クレソンなど）がほとんど無く泉の絵葉書を作った頃の姿ではなくなりましたが、ハグロトンボも飛び交っていましたし空気感もすがすがしく良い環境でした。農業用水として水利権があり維持管理がしやすい状態に工事がされるとの情報もあり、今後の変化を見守って行く必要がありそうです。

*東温市 国の登録有形文化財「除けの堰堤」

山ノ内地区へ向かう途中に川をせき止め水泳が出来る場所では、夏休み最終日にもかかわらず大勢泳ぎに来ていて酷残暑は何時まで続くのでしょうか。この場所に近い上流に「除」のバス停の川側にあるのが「除けの堰堤」です。愛媛県土木部砂防課の説明者から頂いた資料によると、

重信川は、河川延長が短く川床勾配の非常にきつい急流河川であり、古くから氾濫を繰り返した。このため、下流域を土砂災害から守ることを目的に昭和7年に県営工事として同堰堤の建設に着手し昭和10年3月に完成した。瀬戸内海の島石を一万七千個余り使った伝統的な石積み工法であり、歴史的な土木構造物として高く評価されており、現在においても圧倒的な造型美を誇り、土砂流出防止の機能を維持している。このようなことから、平成13年4月24日文化庁の登録有形文化財として指定された。

東温市の住民でありながら知らない場所が多くあり、たくさん学ぶ事ができ酷残暑の中でしたが有意義な時間でした。

(A・M)

9月例会報告

9月8日(水)林宅において、お昼の12時から各自お弁当持ち寄りで9月例会を行いました。参加者は7名+小さな参加者1名でした。

先ず、空腹を満たすためにお弁当タイム、持ち寄ったお弁当がそれぞれバランスの取れた見事なものだったので、少しずつ分け合っていました。結果豪華な料理のプチパーティーとなりました。主婦の力はすごい！を実感しました。

今春新築訪問および出産祝いにうかがったお宅のSさんが、少し遅れて久しぶりに顔を出してくれました。もちろん、赤ちゃんも一緒です。何とこの日が満1歳の誕生日だとのこと。しっかりした顔立ちの男の子です。それぞれ孫がいても不思議ではない会員がほとんどなので、赤ちゃんが入るとどうしてもそちらに神経がいつてしまいます。この殺伐とした世の中に、ほほえましいことではありました。

さて、本題に入ります。懸案となっていた蝶のパネル展について話し合いました。S・Kさんが撮りためていたジャコウアゲハを中心にした写真をCDにおとし、事前に会員に配って来ていました。全員それをみていたので、それぞれ考えていることを出し合って検討しました。

できることから、できる時期にしていこうという合意のもとに、どのような形にするかを考えました。蝶は色々いますが、私達はジャコウアゲハに絞ることにしました。ジャコウアゲハは、ウマノスズクサだけを食べて育つので、キャベツなどを食べて育つ他の蝶のように人間の目の敵にされることがないこと(これはジャコウアゲハの絵葉書を作った時の思いでもあります)、K・Kさんが、長年取り組んできてくれて、情報が蓄積されていること、K・Kさんからウマノスズクサをもらって育てた別の会員S・Kさんの庭で、実際にジャコウアゲハが一生を過ごしている(詳細な記録写真あり)、その生息範囲が少しずつ周囲のお宅にも広がりつつあるという事実があることからの結論です。コンセプトは『蝶の来る庭』+『自然再生・ジャコウアゲハとともに』で、ジャコウアゲハの1年(一生)カレンダーを作って、展示することになりました。次の例会までに、展示する写真を選び、形にしていこうと決まりました。会員の庭でウマノスズクサの苗を育てて、それを希望者に持ち帰ってもらい、2キロの範囲を行ったり来たりするジャコウアゲハの来る庭からジャコウアゲハの来る地域を目指そうということです。

まずは、できることから・・・・・・ということで、ジャコウアゲハのカレンダーを作成し、それを郵便局、銀行など無料で借りられるところを巡って展示していくということになりました。まだ、詳細は決まっていません。今後さらにつめてい

くことになるでしょう。ご意見・ご希望をお寄せ下さい。

余談ですが、例会の後、みんなでS・Kさんのお庭を見せてもらいに行きました。木が立ち、草花が咲いている中に、ウマノスズクサが生え、さなぎがついていて、そのまわりをジャコウアゲハが乱舞する、素敵な光景でした。お向かいのお宅、隣のお宅にも蝶が行ったり来たりして、小さいながらも、人と、植物、昆虫の豊かな共生がみられました。

(T・H)

例会直後のメールより

いつも、いろいろな情報をありがとうございます。

気候がもう少し落ち着けばウマノスズクサのおすそ分けをしていただいて蝶の繁殖に挑戦しようと思います。

自分の庭で蝶々が飛び出したら、地元の地縁で、友人知人に、おすそ分けをする5年計画構想をめざします。

ただし、最初から熱を入れすぎると、途中で、とん挫になりかねないので、徐々に、経過を楽しみながら育てようと思います。

我家の蝶の庭作り構想が動き出しました。(笑) (M.T)

久しぶりに楽しい時間を過ごすことができました。ありがとうございます。

次はパネル展示が楽しみです。製作にも参加したいのですが、我が家にはゴジラのように邪魔をする生きものがいるので、別のところで協力させていただきます。ところで、ウマノスズクサを我が家にも増やしたいのですが、問題がありまして一私はイモムシが苦手なのです。

でも、その辺りにはえている草にもイモムシはたくさんいるので同じことですね... それと、東温市のものをこちらに持ってくるのはどうでしょうか。同じ水系ですが、上流同士で自然な移動はないですから、この近くのを増やした方がいいかもしれませんね。

もう一つ。既にご存じのこととは思いましたが、ウマノスズクサの毒が気になって調べてみました。ネットの情報ですが、(財)日本中毒情報センターのホームページでは、以下のように書かれていました。大量というのが大雑把な印象ですが、まあ、あまり食べないように注意してもらうのがいいでしょうね。

ウマノスズクサ(別名:ツンボグサ)(ウマノスズクサ科)

有毒部位 全草(とくに根、果実)

有毒成分 アリストロチン、マグノリンなどのアルカロイド

症状 大量に摂取すると、血便や呼吸困難

処置 基本的処置・対症療法 (T.S)

ジャコウアゲハ 2010

今年の夏はジャコウアゲハがご近所のアイドル的存在となった。卵が！幼虫が！蛹が！また増えとる！！とか、道路でもジャコウアゲハが優雅にヒラ ヒラ ヒラ、「飛びよる！飛びよる！」あそこにも、ここにもと数えてみたり。じつに人懐っこくよく近くへ寄ってくる。花粉を吸っているときなど手を近付けても一向に飛び立とうともしない。自分の家で育ったものだけに愛おしくその可愛らしさはこの夏の清涼剤ともなった。毎日のようにデジカメでカシャッ。画像の整理をしながら改めてその姿を存分に楽しんだ。

6月28日、今年初めて我が家の庭にジャコウアゲハが飛んできた。庭のどこかで蛹で越冬した蝶の命の輝き。ジャコウアゲハと関わって5年目になる。Kさんから株分けしてもらった食草のウマノスズクサ。冬には枯れてしまい跡形もなくなったものが、春先になると何本もの茎がニョキニョキと立ちあがり、やがて傍にある梅の木に絡まりながら葉っぱが茂りキウイの棚にまで登っていく。

こうして今年もジャコウアゲハの食べ物の準備が出来たところでKさんが大量に幼虫を持ってきてくれた。2年前からウマノスズクサを育ててくれている近所にも9個の幼虫を持って行きその葉っぱに乗せてやる。さあそれから観察が始まった。ウマノスズ草の葉っぱのみならず茎もまるかじりする位の旺盛な食欲。産卵⇒孵化⇒幼虫⇒蛹化⇒蛹⇒羽化⇒成虫 この過程を何度も楽しんだ。

ウマノスズクサの葉の裏に産み付けたゴマ粒ほどの卵は一週間位で孵化し米粒ほどの幼虫になると少ずつ移動しながらウマノスズクサの柔らかい葉っぱの縁から食べ始める。お腹一杯になり4cmほどに成長し蛹化するようになると、ウマノスズクサを離れていく。我が家のキウイの葉っぱの裏で無数の黄色い蛹が羽化する時期を待っている。蛹化する時は衣を脱ぐように足元まで丸めていく。あの虫？の中にこのようなものが育っているのかと感心する。そして何度見ても奇妙な姿の蛹。夕方まで蛹だったものが早朝に見ると羽化したばかり、翅が伸び切らない姿、やがて翅が広がると濡れた翅を乾かすためかしばらくその場でじっとしている。なかなか羽化しないのもある。よくよくみれば中は空っぽ。アリに食べられたみたい。羽化したのに天敵のかまきりに食べられているのをみた時は心が痛んだ。後ろ翅のちぎれた蝶が子孫を残そうと何度もウマノスズクサに卵を産みつけようと必死の姿もみた。9月22日今日も数種類の蝶が乱舞している。

来年の春にはご近所の協力を得てジャコウアゲハの飛ぶ範囲をもっと広げたい。

(S. K)

離乳期の食べ方あれこれ

先日、下の息子が1歳になった。まだまだおっぱい大好きだけれど、食事も一人前に食べている。配膳をしているときから食卓に寄ってきて、「早く食べる～」と叫ぶ（まだ言葉は出ないので、実際には「あー」とか「んー」とか言っている）ほど、食べるのが大好き。

小学校1年の上の息子のときには離乳食で戸惑った。お産のとき、「家族の食事の時に欲しがったら離乳期ですから、離乳食はそれからで構いませんよ」と言われたので、待っていたら7ヶ月を過ぎてしまい、欲しがらないけど始めようかと、まず、おかゆを口に入れてみたらブーと吐きだした。野菜のペーストでも同じように吐きだす。何日も試しているうちに母子とも苦行のようになってきてウンザリした頃、ふと思いついてご飯粒を口に入れてみたら、うれしそうに食べた。つまり、ドロドロした食品が嫌いだったのだ。彼は今でも、おかゆはもちろん、プリンのような食感のものを好まない。

その上、味にもうるさかった。梅干し、焼き魚、きのこ類などを好まず、口に入れると震えていた。初めて納豆を口に入れたときには、胃の中に入っていたものも一緒に吐きだした。

その様子を見て私は、自然界において、ドロドロや酸味は腐敗の、苦みは毒のサインであるし、納豆やきのこ類は菌類だから好まないのもあろう、それこそが自然の知恵であろうと解釈していた。

ところが、下の息子は何でも食べてしまった。ご飯に味噌汁、梅干し、青菜、人参、納豆、茄子、魚、豆、きのこ類…酸っぱいものは酸っぱい顔をしながら、苦いものは苦い顔をしながらモグモグと食べている。食卓にあるものは何でも食べてやるぞという意気込みが感じられるほどである。

これでは、6年前の私の分析が通用しないではないか！と思っていたところに事件が起こった。託児先の保育士さんが差し出すおやつに口を開けなかったのである。いつも食べているものを渡してあったので、おやつが原因ではないはずである。

とすれば、おやつを差し出す大人を信頼しているかどうかの鍵のような気がしてくる。信頼するお母さんがくれるのだから大丈夫と判断して食べる。初めて会った人はまだ信頼できないから食べないー兄とは違うタイプであるが、そこにも自然の知恵が隠されているように思えてきた。

子どもには子どもなりの都合があって、食べたり食べなかったりするのだろう。栄養があるからとか、体に良いからなどと知識で食べ物を選ぶことはない。子どもの都合とはどんなものなのか。もっともっとたくさんの子どものを見てみたいと思う今日この頃である。

(T.S)

安楽死

誰もが老いて来ると、静かに楽にあの世に逝きたいと思うことだろう。実弟が肺癌に罹り余命半年か一年と宣告されたが病院は冷たいもので、通いで抗がん剤を打つように言われた。北条から松山迄通う事が大変で、家にいる時も倦怠感と吐気で食欲もなく、主治医と相談の上、安楽死を選びペテル病院に転院した。食欲がないので点滴はしてもらえるが、癌の勢いがおとろえず癌細胞がどんどん増して、痛みが体中を襲う様になった。この頃からモルヒネの量を少しずつ増し、痛みは抑えられたが、立つことも出来なくなり、体は痩せる一方となった。

その頃、愛媛新聞の四季録の欄に「安楽死」①②がのつたので、関心もあり詳しく読んだ。「安楽死」には人工呼吸器や薬物行為など治療を中止する「消極的」なものと、疼痛緩和のための治療で、致死薬を与えたり呼吸を妨害することで死を早める「積極的」なものがあるそうだ。本人の意思や家族の同意がないまま行えば、「慈悲死」となり法的に許されない殺人と判断されるそうだ。

時々新聞やテレビで問題になっているのを他人事のように聞いていたが、家族にその様な事が起こるとは夢にも思っていなかった。弟の場合は、ペテルに入院した時に主治医から詳しい説明があり、本人も家族も「安楽死」を選び、苦痛を救ってもらえたと思えば、殺人でも罪でもなく楽になったと思うべきだが、医者にも家族にも、何か後味の悪いものが残り「安楽死」という言葉の重さを感じた。

7月2日、苦しみはなかったそうだが、目を大きく見開き、一言の言葉もなく息が絶えたそうだ。知らせを受け駆けつけた時は、冷たくなり静かに眠っている様だったが、子供達が、「お父さんは優しくかった。感謝しとるよ」と頭をなで、顔をさすりながら泣く姿に、こちらも涙し、天国へ旅立ただろうと安心した。

弟が生まれたのは昭和20年、終戦の年の1月2日。食べ物が無い、お湯の中に米と麦が浮いている様な栄養の中で生まれた時の体重は2kg 骨ばかりだった。戦争が激しくなり母の里に疎開することになった。私が小学校5年、父と姉は松山に残し、母の助けは私に懸っていた。3人の妹の世話と食事の支度今では考えられない5年生だったと思う。弟は母乳が出ないので体重が増えず、山羊の乳を薬缶に貰って来て飲ますことになり日増しに大きくなったが、困ったことが起きた。栄養がオーバーだったのか、湿疹やでき物が体中に出来、医者通いも私の仕事だった。

父親が肺癌で亡くなったのが60歳、弟が中学校3年生だった。躰の厳しい父が亡くなった事が原因か勉強もせず母親を困らせ遊び癖が続き仕事は真面目に働くが、お金は右から左、反省すること数え切れず、この姿に父と母が、産んだ責任を感じ、自分の元へ呼んだのかもしれない。49日の法要をすませ、父と母の横で眠ることになった。短い人生だったが、安楽な人生だったとは思えないのは私だけだろうか。

(Sa・K)

雑 感

荒々しかった梅雨が明けた後に訪れた酷暑の日々。本当に暑い夏でした。松山市では7/16~9/12まで二か月近くも真夏日が続き、その内の14日間は猛暑日でした。台風の発生数が少ないにも拘らず各地で局地的なゲリラ豪雨や都市型水害による被害が続出し、松山市でも7月12日の朝、松山城の城山のふもとで土砂崩れがあり、正岡子規、夏目漱石ゆかりの「愚陀仏庵」が押し流されて全壊してしまいました。

世界では、ロシアで猛暑、干ばつ、森林火災が続き、中国は大雨洪水に見舞われ、南米は寒波に襲われました。9月3日、気象庁は30年に一度の異常気象だと発表しました。原因は春先のエルニーニョ現象と夏になって発生したラニーニャ現象の相互作用に加えて偏西風の蛇行とされています。では、何故太平洋の赤道付近の海水温が高くなったり、低くなったり、偏西風が蛇行したりするのでしょうか。説明を聞いて益々混乱してしまっています。

そんな暑さも久々のまとまった雨で、少し秋の気配を感じられるようになりました。稲は頭を垂れ金風が芳ばしい香りを運んできます。次々に稲刈りが進んでいます。

作家の池澤夏樹氏は7/11の参議院選挙を前にして“菅直人首相は就任の記者会見(6/8)で「政治の役割は・・・『最小不幸の社会』を作ることだ」と言った。久しぶりに為政者の口から質量のある言葉を聞いたと思った。小泉元首相の行った、ジェレミー・ベンサムの「最大多数の最大幸福」を根拠とするあからさまな「自由至上主義」とは対極にある。小泉政権は好況になれば富は下のほうにまで流れてくるというトリクルダウン理論の上に成り立ったが、まったく機能せず、下流で待っていても何も来ない悲しい流し素麺現象で終わり、所得格差を示す日本のジニ係数はじりじりと上がり、その結果が今の格差社会であり、昨今の先行きの暗さの理由。人には生まれつきやその後の人生で運不運がある。運がいい人はその波に乗って勝手にやっつけていけばいい。国はそれを邪魔はしない。しかし、運の悪い人を奈落に落とすことなく、手を貸して安定した位置に戻す—これは国家の基本的な機能の一つではないか。”と評し、民主党に望むこととして“しかし現実の政治は理念だけでは動かない。目前の政策には問題山積。普天間についての政策はとて容認できない。それでも、参院選前に消費税を10%に上げることも検討と言ったことはフェアな態度だ。「世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない。」と宮澤賢治は言ったが、せめてこの国に不幸な人の少なからんことを目指したい”と述べています。(2010.7.8.朝日新聞)

参議院選挙で民主党は議席数を大きく減らす結果となりました。解説者の多くは、昨年の衆議院選挙のマニフェストに“4年間は消費税を据え置く”と謳ったにも拘わらず消費税に言及したことが敗因だとしていましたが、私はそれ以上に、沖縄県で民主党独自の候補者を立てることさえ出来なかったこと、鳩山由紀夫氏の目に余る言行不一致と国民とあまりにかけ離れた金銭感覚、小沢一郎氏が自らの疑惑について国会での証人喚問、参考人招致、政治倫理審査会への出席を拒絶し続けたことこそが問題だったと思えてなりません。

初の邦訳書「経済成長無き社会発展は可能か」－作品社－を刊行したフランスの経済哲学者セルジュ・ラトゥーシュ氏はグローバル経済から離脱『脱成長』し、経済の規模を徐々に小さくさせ本当に必要な消費にとどめることが真の豊かさにつながると説いています。“私が成長に反対するのはいくら経済が成長しても人々を幸せにはしないから。成長のための成長が目的化され、無駄な成長が強いられ、汚染や、ストレスを増やすだけ。最近広く受け入れられている「持続可能な成長」は語義矛盾。地球が有限である以上、無限に成長を持続させることは生態学的に不可能。より本格的な解決策は、グローバル経済から離脱して地域社会の自立を導くこと。『脱成長』は、成長への信仰にとらわれている社会を根本的に変えていくための、一つのスローガンだ。「北」の国々による従来の開発は「南」の国々に低発展の状態を強いたうえ、地域の文化や生態を破壊した。「南」の人々自身がオリジナルの道を作っていけるようにしなければならない。政治家達は資本主義に成長を、緊縮財政で人々に節約を求めるが。本来それは逆であるべき。人々はもっと豊かに生きられる。我々の目指すのは、つましい、しかし幸福な社会だ。”
(2010.7.22.朝日新聞)

早速、本を取り寄せました。彼の目指すものには大いに共感しましたが、残念ながら経済学的知識が皆無に近い私は完全な理解にまでは至りませんでした。うだるような暑さの中、途中何度も頓挫しそうになりながらの読書は数十年も昔の高校時代の夏休み、“カラムーゾフの兄弟”に悪戦苦闘したことを懐かしく思い出させてくれました。

菅直人首相の私的諮問機関「新たな時代の安全保障と防衛力に関する懇談会」が首相に提出する報告書案の全容が7月26日、明らかになりました。非核三原則の見直しにも踏み込み、必要最低限の防衛力を持つとする「基盤的防衛力」構想を否認、離島付近への重点配備を強調しています。その骨子は*「基盤的防衛力」の概念が有効でないと確認。*非核三原則に関して、一方的に米国の手を縛ることは必ずしも賢明ではない。*離島地域は、自衛隊の部隊配備を検討する必要がある。*武器輸出三原則下の武器禁輸政策は見直しが必要。*PKO参加5原則は、修正を積極的に検討すべき。とされ、報告書は8月上旬、首相に提出、今年末に民主党政権として初めて策定する「防衛計画の大綱」のたたき台になるとされています。

物騒で違和感のある内容です。

その報告書を受けてのことでしょうか、8月6日、広島市の平和祈念式典で菅首相は、あいさつでは“唯一の戦争被爆国である我が国は「核兵器のない世界」実現に向けて先頭に立って行動する道義的責任を有していると確信をいただきます。”とし、非核三原則の堅持を誓いました。しかし、秋葉広島市長が平和宣言で、アメリカの「核の傘」からの離脱と非核三原則の法制化の要求をしましたが、数時間後の記者会見で首相は“核抑止力は我が国にとって引き続き必要”と述べ、官房長官は非核三原則の法制化は必要ないと明言しました。この一貫しない発言に作家の大江健三郎氏は国連の潘基文氏が広島で“核の危険を排除するには核兵器を全廃するしかない”と講演したこと、沖縄返還時の核密約の働き手キッシンジャー氏をはじめとする古強者たちでさえ“核兵器を使用した唯一の核保有国として、米国には行動すべき道義的責任がある”

とするオバマ大統領の 2009 年のプラハ演説の 2 年前、“抑止は、他の国家による脅威という文脈においては、多くの国家にとって依然として十分な考慮に値するものとされているが、このような目的のために核兵器に依存することは、ますます危険になっており、その有効性は低減する一方である”と提言していることなどを紹介し、彼らは、いまオバマ演説にあらためて呼応する強力な活動を展開しアメリカ、ヨーロッパの「核兵器のない世界」への新しい流れを作っているとし、被爆国の道義的責任とは「核の傘」からの離脱をもとめてこそだと苦言を呈しています。(2010.8.17.朝日新聞)

核兵器に留まらず、武力によって自国、同盟国を守ることができる、守ってもらえる、との考えから解き放たれたとき真に自立した安寧国家と成熟した国際関係が生まれると信じます。その為にも、真に機能する国連の構築が望まれ、相手の立場を尊重し相手を理解したうえで、自分の考えを表現し、対話することが必要なのだと思います。今、文部科学省は 2011 年度から小学校での英語活動を必須にすることにしました。企業の中には国際的な競争力を得るために英語力が不可欠であるとし、社内での公用語を英語に限定するところも現れています。いまや国際共通語になっているといっても言い過ぎではない英語は、出来ないより出来たほうが便利で楽しいに違いありません。しかし、母語である日本語を使いこなし、物事を深く考え、自分の考えを持ち、冷静な意見交換ができる為の教育こそ、急務だと考えます。

米海兵隊普天間飛行場の移転先として日米が合意した沖縄県名護市で 9 月 12 日行われた市議選で、受け入れに反対する稲嶺進市長を支持する勢力が過半数を占めました。それでも名護の人たちは希望を持ちきれないでいます。普天間の危険除去のために一日も早く飛行場は撤去されるべきです。しかし、その後、日本の安全維持のために日本のどこかに基地を移すことが本当に必要なのでしょうか？二国間の合意という重い約束がある以上、これを白紙に戻して一から話し合いをやり直すことが、いかに困難を極めるかは容易に想像ができます。それでも、一步を踏み出さなければ何も始まらないのです。沖縄の人たちは充分長すぎる年月、日本全体の問題として取り上げられることさえなく、ただ沖縄だけの問題として放置されていたにも等しいのです。「日米安保をどうすべきか、国民に議論してほしい」それが沖縄の人達の願いです。『ブルーセーター 引き裂かれた世界をつなぐ起業家たちの物語』の著者であり国際 NPO (非営利組織) アキュメンファンドの CEO (最高経営責任者) であるジャクリーン・ノヴォグラツさんの“必要なのは変えられると信じる大胆さと、正解がないかもしれないと理解する謙虚さ”という言葉を噛みしめています。

宮崎県で広がった口蹄疫は、最初の発生確認から 4 ヶ月余り経った 8 月 27 日、漸く終息宣言が出されました。およそ 30 万頭の家畜が命を奪われ、今後 5 年間の経済的損失は約 2350 億円と試算されています。初動対応のまずさ、獣医師や行政担当者の不足、埋却地不足、感染ルート不明の解明遅れ、などが指摘されています。しかし、鹿児島大学名誉教授、萬田正治氏は、その指摘は問題の本質とは言い難いと言及しています。“根本的な問題は、旧態依然たる国際獣疫事務局 (OIE) の指針とそれに盲従する日本の対応策、そして近代化畜産にあるのではないか。

OIE は世界を口蹄疫発生が無い「清浄国」と有る「非清浄国」に分類。非清浄国は貿易相手国から禁輸措置を受ける。清浄国では発生すると輸出規制による経済的打撃を受けるため、徹底した封じ込め作戦と全頭殺処分で見事に口蹄疫ウイルスを一掃してきた。しかし、人と物の往来が地球規模で頻繁に行われる今日、病原体を陸海空の国境ラインで未然に防ぐことはほぼ不可能であるし、感染ルートには渡り鳥や野鳥説もあり、これらを絶滅させない限り防止はできない。そもそも病原体に対して、人間を含む動物はその抗体を身につけて対処してきた。これに抗して病原体は耐性を獲得したり、新型の病原体となったりして反撃する。この繰り返しが生物の進化だ。従って、無菌化社会を進めていけば、かえって動物の持つ免疫力を衰弱させ、動物たちを危機に陥らせることになる。今回、発病しなかった家畜を残せば抵抗力のあるものを選抜できた。

戦後の日本畜産の近代化は経済効率を第一義に考え、規模拡大路線を押し進め、一極集中型の大量飼育で密飼いし、輸入飼料に依存してきた。これでは家畜本来の抵抗力は失われ、感染した場合は一気に農場内に広がる。病原体に汚染された輸入飼料が持ち込まれる危険性も常に高い。OIE の指針を再検討し、近代化畜産の改善策に迫り、遮断と撲滅一辺倒の衛生行政から抜け出すことこそが、真の解決策だ。OIE の加盟国として、口蹄疫を経験した日本から提言すべきだろう。”(2010.8.28.朝日新聞)

4月21日に亡くなられた細胞免疫学の先駆者、多田富雄氏が「過剰な無菌思考」を案じて“子供がたまに発熱したりするのは微生物との戦い方を習得しているから。成長期に戦い方を学習しないと、雑菌に対する抵抗力が弱くなり、逆にアレルギーを起こしやすい体質になる。”と書いておられたのを思い出します。

最近、多剤耐性アシネトバクター、多剤耐性緑膿菌、ニューデリー・メタロ-β-ラクタマーゼ1 (NDM-1) などの多剤耐性菌感染が世間を騒がせています。NDM-1 以外は健康な人が感染しても殆ど発症しないと言われていてから、普段から、抵抗力を低下させない様バランスのとれた食事、規則正しい生活を心がけ、体調を崩した時は信頼できる医療機関で適切な指示と処方に従うことが何より大切です。NDM-1 は緑膿菌やアシネトバクター同様、メタロ-β-ラクタマーゼ産生菌の一つですが、問題は、一般感染症の起炎菌としても頻度の高い大腸菌や肺炎桿菌から分離されていることです。又、今後 NDM-1 遺伝子がサルモネラ菌や赤痢菌などの、より病原性が高い菌に伝播、蔓延した場合、重症、難治例が増加するのではないかと危惧されています。多剤耐性菌の出現は1929年の世界初の抗生物質ペニシリン発見以来の人間と感染症との戦いに起因していることを考えると、医療機関には抗生物質への安易な依存に対する自省と再考が求められ、畜産や養殖における飼料への抗生物質の乱用は厳に慎むべきです。1990年代終わりにメチシリン耐性黄色ブドウ球菌やバンコマイシン耐性球菌が問題になりましたが、バンコマイシン耐性球菌の出現の背景には家畜飼料への抗生物質大量投与があったとも言われています。その一方でいっさいの医療行為を受け付けないホメオパシーという療法も問題になっています。医学界から異例の警告が表明されました。極端な時代になってしまった様です。医療や行政への不信の表れでしょうか。

10月に名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議（国連地球生きもの会議=COP10）が開催されます。

くらしの学習会のS.Kさんからジャコウアゲハの観察記録写真のCDを頂きました。彼女は学習会の仲間で“蝶の来る庭”の刊行に尽力したK.Kさんから貰ったジャコウアゲハの幼虫の里親になり、庭に食草であるウマノスズクサを植えて大事に育てています。愛嬌たっぷりの幼虫。美しく変身する時をひたすらじっと待つて過ごす蛹。ドキドキする羽化の瞬間。ノウゼンカズラに潜り込む様にして無心に吸密。仲良しのペットの猫。お腹がいっぱいになったのでしょうか空高く飛翔する様子は“遊びに行ってきたま〜ず”とでも言っているかのようです。カマキリに襲われている!!。 厳粛な産卵。翅がボロボロになって迎える終わりの時。何度見ても引き込まれ、飽きることがないのは、写真の総てが、彼女のジャコウアゲハに向ける愛情の深さに裏付けられているのは勿論ですが、チョウも、カマキリも、猫も、花たち植物も、ただ、生きること、命を繋いでいくことに無心で邪念がなく健気だからだと思ふのです。

夏のある日、NHK ラジオの“夏休み子ども科学電話相談”で、“完全変態する昆虫は、蛹になった時、蛹の中で一度ドロドロのコールトール状になり、体を完全に作り替える。”という話を聞いて驚いたことを思い出しました。その話を K.K.さんにしたところ、“蛹の中での排泄物が蝶の模様を作る。”と聞き、またまた吃驚です。神秘という他ありません。

暑かった今年の夏、砂漠のようになった我が家の庭にハグロトンボが遊びに来てくれました。早朝、近くの水路ではカワセミが美しい碧の宝石のような姿を見せてくれました。

我が家の周りは田圃に囲まれています。田圃は生きものの宝庫だと言われています。咲き始めた彼岸花に大型のモンキアゲハがやって来ていました。耕作放棄地を減らすためにも、農地法の縛りを緩和して欲しいものです。小さい農地でも購入が可能になり、水利組合に加入することが出来れば農作業をしたい人は少なくないと思います。

身近な生きものとの触れ合いこそが生物多様性を守る力になる様な気がしています。

9月19日、英・BP社とアメリカ政府はアメリカ史上最悪の4月におきたメキシコ湾原油流出事故の原因となった海底油田を完全に封鎖することに成功したと発表しました。これで漸く流出事故は終息しましたが、破壊された環境の今後の復活を見守りたいと思います。

8月5日チリの鉱山で落盤事故が起こり、18日目にして奇跡的に作業員全員の生存が確認されました。当初の予想より早く救出できる見通しだとのことですがそれでも数ヶ月かかると思います。生存が確認されるまでの18日間、彼らの心中を考えると、その強靱な精神力と仲間の絆に頭が下がります。正岡子規が「病床六尺」で“悟りを開くとは、平気で死ぬことだと思っていたが、そうではない。平気で生きることだ。”と記していたことに通じると思いました。作業員の一人に赤ちゃんが誕生し、エスペランサ（希望）ちゃんと名付けられました。一人として欠けることなく全員が家族と再会できることを願って止みません。

(K.O.)

編集後記

早朝からの雨、昨日とは一転ひんやりした一日になりました。地球上の全てに異変を感じます。気候だけではなく、世界の国々の力関係も大きく変わろうとしています。そして国内では課題山積、菅総理がうたっている有言実行内閣、是非実行してほしいものです。9月22日「愛大医学部周辺のまちづくり講演会」にくらしの学習会のメンバー3人で行ってきました。

講師の名城大学の長谷川直樹先生はまちづくりのポイントとして

- ・まちづくりの取り組みには理由がある。
- ・まず行動すること。
- ・自分達でできることをする。
- ・小さなきっかけを大きく育てる。
- ・固定観念（常識）だけで判断しない。
- ・時間軸で考える（20年後を見据えて）
- ・「楽しんで」活動する。

「蝶のくる庭づくり」を目指す ヒントになりそうです。(S. K)

10月例会のお知らせ

10月9日(土) 13:00～ 林さん宅にて

くらしの学習会では、随時会員を募集しています。

活動会員 2,000円/年 購読会員 1,000円/年
振込先口座番号(郵便局) くらしの学習会 01610-5-21026

問合せ先 TEL/FAX 089-964-6956

E-mail: kt-hayashi@nifty.com